

特集

教育としての天文民俗

～異分野としてでなく天文教育の根幹に迫る試み～

北尾浩一（星の伝承研究室）

1. はじめに

天文民俗は、天文教育、理科教育で習得をめざす知識や手法とは異質のものである。昔の人は星を用いて時間、季節、方角を知ったというように、過去のこととして、現在では使われない知識、手法として取り上げられた。昔ながらの星と暮らした生活に、自然との共生、自然とともに生きること、そして、そのなかで語られた物語、伝承に情緒的な意味を見出す、それらは天文教育に大切なことであっても、根幹にかかわるものとは位置づけられなかった。星の和名、七夕、月見など、プラネタリアムをはじめとして、天文教育普及の現場で語られることは、星・宇宙への関心を高めるにあたって、また人と星・宇宙とのかかわりを考えるにあたって、大切なことであるが、あくまでも補助的な存在であったのではないだろうか。

本稿では、天文民俗を理科教育、天文教育と対立するもの、別のものとしてではなく、また、古くから伝承されてきた固定されたというか静的な知識でもなく、生活しているときに、実際に対象すなわち星を観察し、それをもとに判断し行動していくという経験を積んでいくプロセスを教育として意味付け、それに今日の意味を考え、天文教育の根幹にかかわるものとしての天文民俗の可能性を議論したい。

2. 観察から形成された星名伝承

2.1 鼓星と錨星

鼓星（つづみぼし）と錨星（いかりぼし）という和名（以下星名と記す）は、プラネタ

リウム等の天文教育現場でよく使われる。しかし、日本ではオリオンを鼓星（図1）と昔から呼ばれてるとか、カシオペアのWを錨星と呼ばれていると言ってはいけない。全国を歩いて、ほとんど記録できないのがこの二つの星名である[1]。確かに、説明するには好都合な星名だが全国的に分布しているわけではない。オリオンを鼓の形として認識するのはなく、三つ星だけ、その次は三つ星と小三つ星、三つ星と小三つ星とη星を加えた梃の形を認識し、その部分に星名形成が集中した。

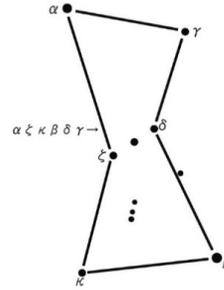


図1 鼓星



図2 星名形成の集中する部分

2.2 事例—茨城県北茨城市大津町

前項において述べた星名形成の集中する部分について、具体的な事例をもとに考えたい。

1985年5月、大津町の漁師（明治29年生まれ）より聞き取り調査を実施した。サンボシ（オリオン座三つ星）とムヅラ（プレアデス星団）になぜ注目して名前をつけて時間を知るようになったかについて、次のように語った。

「サンボシで時間みたり…。ただ、少し格好がちがってるだけで。みな星はひとつずつこうなってるのが三つそろってね、また、そばにも小さな光で三つそろっている。こういう星は、ねえわけなんだね。ムヅラいうのも、ひとところにごじゃごじゃと、こう六つばかりかたまってる。それもねえわけなんだね。そういうねえものを名前つけて、時刻をはかったりしたんだね」

3つ並んだ星の配列には、「わし座アルタイルと β 、 γ 」「さそり座アンタレスと σ 、 τ 」もあるが、ほぼ「同じ間隔」「同じ明るさ」「一直線」は、オリオン座三つ星（ δ ϵ ζ ）である。そして、そばにも小さな光で三つそろっている星は他にない。

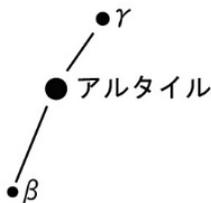


図3 わし座アルタイルと β 、 γ



図4 さそり座アンタレスと σ 、 τ



図5 オリオン座三つ星（ δ ϵ ζ ）

「そういうねえものを名前つけて、時刻をはかたりしたんだね」と語ったように、オリオン座の日本の星名形成は、鼓の形ではなく、まずは、三つ星（ δ ϵ ζ ）の配列、その次に目立つ配列即ちオリオン座三つ星と小三つ星と η 星の配列に形成されたのである。

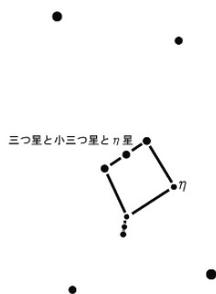


図6 オリオン座三つ星と小三つ星と η 星



図 10 ムツラボシの唄

3.3 事例—沖縄県国頭郡本部町のシニグ

沖縄県国頭郡本部町具志堅において、シニグ（豊年祈願の年中行事）で黄金三つ星が唄われていた（2020年10月調査、話者生年：昭和8年）。

「ティンヌブリーブーシーヤーヨー ンナガ ウィードーテユール サー クーガーニー ミチブシーヤーヨー ユイサ ワーウィドーテ ィー イユルー スーライ シタリヌ クー ガーニーミチブシーヤーヨー ユイサ ワー ウィドティー イユルー スーライ」

喜界島、与論島等に伝えられている黄金三つ星の俚謡が異なったメロディーで、シニグという祈りの場で唄われていた。

3.4 事例—沖縄県島尻郡粟国村の祝詞

旧暦の大晦日、豊年を祈願するために家から家へとまわってトーンサリ（祝詞）を唱え

た。

「んむがなさちゆくらしみそーらー、みとうぐたあ、ゆとうぐたあ、ティンガーラうっちゃんねえちゆくらしみそるかふーとうで一びる」

イモ等が3つ、4つ置いたのがいっぱい天の川（ティンガーラ）のように、と大晦日に翌年の豊作を願った（2020年7月調査、話者生年：昭和13年）。

3.5 教育としての意味

星を唄い、祝詞を唱え、あるときは踊り—という身体表現・芸術表現を、教育として意味づけると次のようになる。

(1) 生活知識の習得の徹底

観察が唄や祝詞に反映され、星の知識内容の継承、習得、共有化、生業にかかわる行動の徹底を実現する。

(2) 人間としての表現、文化の創造

生活、生産を維持するための願い、祈りの段階から心の豊かさ、多様で豊かな表現、文化の創造の段階への移行を実現した。

(3) 世代を超えた継承の実現。

唄うこと、踊ることを通して世代を超えた継承という教育機能を実現した。

4 星に名前をつけるということ

4.1 星に名前がない、必要としないケース

星名形成、俚謡等を、観察として、教育として意味づけてきた。しかし、コミュニケーションには、必ず星に名前が必要であると断定してはいけぬ。星空の下で働き、声を出してそれぞれの地域の名前で語ったはずだと尋ねても、名前なんかないよ…と答える話者がいた。たくさんいた。名前を覚えていないのではなく、名前を必要としなかった。星をめあてに時間を知ったり、方角を知ったりしたが、名前は必要としなかったのだ。

よく口を動かすな、手を動かせ…と言う。

仕事をするのには、言葉はいらない。3つ並んだ星が出る。その方を見る、そして、判断する。その星が出たことをその場にいる人全員がわかっていることは、空気というか、雰囲気であらう。そして、行動がはじまる。その限りにおいて、ことばはいらない。ことばは聞こえない。

多様で豊かな星名形成を研究するとき、名前を必要とするとは限らないという事実を原点として位置付けたい。人間のコミュニケーションのなかで、言葉はあくまでも一部であり、言葉で学ぶことに頼りすぎてはならない。

私自身の調査記録でも、星の名前を必要としないケース、名前が出てこなかったが、星を見たというケースを、多様で豊かな名前を記録できなかったという理由から、丁寧に記録して考察しなかったことを悔やむとともに大きな反省点となっている。

4.2 星の名前にホシをつけないケース

スバルボシ、マスボシ、サカマスボシというように星（ホシあるいはボシ、フシ、ブシ等）をつけて呼ばないで、単にスバル、マス、サカマスというように呼ぶケースがある。仕事の現場でコミュニケーションをするとき、できるだけ短い言葉が好ましい。魚の名前がサバ、アジ、ブリというように二文字が多いが長ければ名前を言っているうちに魚が逃げてしまう。したがって、元はホシをつけない可能性はないだろうか。

5 星が見えないとき

5.1 星が見えないときも暮らしがあった

星が見えないときにも暮らしがあった。むしろ、地平線まで雲ひとつなく、地平線から姿を現す星を目標にできるような天候に恵まれることは決して多いとは言えない。夜なべ仕事の時計代わりにすると言っても、夜なべ仕事を終えて眠るまでずっと星が見えている

というわけではない。星が見えないときにも暮らしがあったということを忘れて、星を見て時間や方角を知ったと言うのは不適切である。むしろ、見えないときに漁があることも多い。たとえば、星の出にイカがつく（釣れる）と漁師は語るが曇りの日はどうしたのであろうか。

5.2 事例—青森県むつ市大畑町湊村

大畑からは、太陽も月も星も海から出る。そして、山に入る。海から出て山に入る。2009年6月、大正11年生まれのイカ釣り漁師から聞き取り調査を実施した[8]。

特定の星をイカ釣りの役星として伝承しており、次のような星の出にイカが釣れるという生活知識を年上より習得していた。

- ・シバリ（かたまって出はる星。スバルの転訛。プレアデス星団）
- ・サンコウ（大きい星3つ並んで。オリオン座三つ星）
- ・アオボシ（青く光る。シリウス）
- ・ヨアケボシ（夜明け星、明けの明星）
- ・目標の実際…シバリ、サンコウ、アオボシ、ヨアケボシの星の出にイカがつく。星が手をのばして（手をのばしながら話された）1尺ぐらい上がると、つかなくなる。ついてもたまにぼつぼつ。星の出になれば、全然つかねえときも、ついてくる。シバリ上がったあと、寝て、サンコウ上がると起きて道具（トンボ、ハネゴ）を海に入れる。

なお、星の出に理由を尋ねると「わかんねえ」という答が返ってきた。

曇天で星が見えないときについては、次のように伝えていた。

「曇りの日、雨の日は、よけいつく。雨で星見えてなくても、だいたい時間、星、上がる時間わかる。機械になっても星関係した。サンコウの出、雨でもわかる」

5.3 事例—山形県酒田市飛島法木

2018年6月、昭和16年生まれのカ釣り漁師から聞き取り調査を実施した[9]。カ釣りの役星として、スバリ（プレアデス星団）、サンコウ（オリオン座三つ星）、アオボシ（シリウス）を伝えていた。聞き取り調査を話者の言葉に忠実に再現する（W:話者、K:北尾）。

W「んだ、んだ、んだ。櫓かいで。トンボ、ハネゴというのは、櫓かいで」

K「そのころ、星が出たとか」

W「いまでも言う。我々で言う。スバリ、スバリって星の名前を言っていたけども。あとサンコウとかのお。サンコウって、三つこうならんで縦に出た。並んで出た。縦に三つこう並んで、同じ等間隔で三つ出るのだ。東のほうから出てくるわけよ」

K「どっちが先ですか」

W「スバリがいちばんはやいんだ」

K「スバリがいちばんはやい？」

W「んだ、んだ、んだ」

K「スバリいうんですね」

W「我々、島の言葉だ」

K「スバリが出てその次に出るのが」

W「サンコウだな。三つ明るいからサンコウいっているのではないかな。漁師の浜の言葉だ」

K「そのあと出るのですか」

W「そのあとの明るい星ひとつよ」

K「明るい星ひとつ？」

W「これわれわれは漁師言葉ではアオボシ、アオボシって言ったのだけだ」

話者によると、星の出、月の出、日の出、日の入りを漁の目標にしていた。

W「やっぱり、星の出るころはイカついたりするんだよな」

W「月出（つきで）とかのお。必ずとれる。

日の出と日の入りで騒ぐのと同じじゃ」

調査を実施したのは、6月23日であった。

明け方、スバリを見ることが可能になる時

季であるので話者に確認すると、「このごろ夜は出ねえから。でも、夜明けは出ていると思うよ」という答えが返ってきた。

曇り空でカ釣りの目標の星が見えないときについて聞く。

K「曇っているときはだめなのですか。星が見えるときでない？」

W「いやいや。だいたいカ釣りの商売をやっているときは、だいたい何時頃なれば、どの星あがってくるとわかるものだ」

K「何時頃なればどの星あがるとわかる」

W「そうそうそう。わかっているものだ」

K「雲あっても？」

W「雲あってもわかるものだ」

K「釣れるのですか」

W「やっぱり釣れるときある。必ず釣れるものでねえけど」

K「曇っていてもわかる？」

W「だいたいよ、きょうは何時頃、星が出るとわかるものだ」

K「曇っていても、見えなくても」

W「んだんだ」

曇り空でも星の出を感じたのであるが、「月の出るときもそうですか」と確認すると、「月の出はやっぱりつく。星より月の出が多いな」という答えが返ってきた。

5.4 故郷離れても故郷の地名の星名を語る

1979年4月、北海道磯谷郡蘭越町で出会った明治40年生まれのカ釣り漁師から聞いた話である。

「どの星のときにでも、イカがつくとは限らない。潮と星の出が合致するとつく、と、わしらは、丹念している。サンコウの出にきのうついたからといって、今日つくとは限らねえ。潮と合わなければだめだ」

そして、話者は、積丹半島からのぼる「ぎょしゃ座カペラ」を積丹星と言わずに先祖の故郷の地から見た能登半島からのぼる光景を

もとに形成された星名「能登星」と呼んだ。

能登半島から遠く離れた北海道で、積丹星ではなく「能登星」が時間軸と空間軸を超えて共有されたのは、伝承の力であった。



図 11 故郷から能登半島にのぼるカペラ



図 12 故郷離れて積丹半島にのぼるカペラ

6 教育と伝承

6.1 伝承は教育の一形態

文部科学省のホームページ参考図表 4「我が国の義務教育制度の変遷」によると、明治 5 年 (1872 年) 学制「教育年限を下等小学校 4 年、上等小学校 4 年の計 8 年としたが、強

制力は弱かった」とある。明治 12 年 (1879 年) 教育令「教育年限は基本的に 8 年であるものの、最短で 16 ヶ月通学すればよいと規定された」とある。明治 19 年 (1886 年) 小学校令『『義務教育』の文言が初めて登場した』…とある [10]。その前は寺小屋があったものの多くの庶民にとって学校による教育で一人前になる知識を習得したのはせいぜいこの百数十年である。

世代を越えた「知」の継承は、学校教育ではなく、伝承という形態によるものであった。また、学校教育が義務化されても、学校へ行かなくてもよいと言われて行かなかったケースもあった。

今日、多くの知識は伝承ではなく、学校教育によって継承されるが、長い歴史から見れば教育は伝承の一形態であると言えるのではないだろうか。教育は伝承 (Education is a subset of the folklore.)

6.2 事例—宮城県本吉郡唐桑町

1993 年 8 月、大正 5 年生まれのイカ釣り漁師から聞き取り調査を実施した。

「イカは、一晩中釣れてるわけじゃないんですね。時間、時々釣れるわけですね。一晩一生懸命釣り具を動かしても、常に食いついてくるわけじゃねえ。時間によって漁がでたりひらいたりするわけです。よくね、カリマタのあがりの時節に釣れたとか、モクサのあがりのときに釣れたとかということは言われたものじゃ…」

モクサ (プレアデス星団)、カリマタ (アルデバランとヒアデス星団で構成する V 字形) が水平線から顔を出すとき釣り具を動かすと、イカが釣れることがよくあった。カリマタの次に顔を出すのはムジラ (オリオン座三つ星と小三つ星) であるが、たとえそのとき漁がなくても、さらに次の星が出る時間まで待った。

「イカなどはね、イカなどは星勘定でね。星の時間帯でアトボシまで見ていこうとかかね。アトボシ出たからもう漁がないから帰ろうかーとか」

アトボシは、おおいぬ座シリウスのこと。最後に顔を出すからアトボシ（後星）と名付けたのである。

このような星の名前を学んだのは、学校ではなく船の上であった。

話者は学校へ行った。しかし、8歳のときから船に乗った。

「私が学校帰ってくるのを待ってるのですよ。その下の浜がある。船があつてね、おじいさんだの、おとうさんだのね、おにいさんたちが浜で待ってるのですよ。私が学校から帰ってくるとね、かばん置いてすぐ浜へ行ったもんですよ」

8歳のとき、星の名前は、わからなかった。高学年になると自分で星空を見てモクサとかムヅラとかわかるようになった。しかし、星によって釣れるタイミングを判断する勘はもちろん、例えば山ばかりで自分の位置を知る勘にしても、そんなに簡単に習得できるものではなかった。

「ただ、漫然と船に乗ってるだけでは覚えられないですよ。やっぱりね、自分でその気がないとね、それも自分でひとりで沖に出る気構えがでてこなけりゃ覚えられないですよ」

7 天文民俗から教育の根幹に迫る

7.1 伝承知から教育の根幹へ

教育、学術、文化は、大学という組織のなかで、生活と離れて存在するのではなく、働くことが学びであり、食べることが文化であり、語ることが教育である世界があり、そのなかで形成され伝承される「知」を大学で研究者が形成してきた「知」と対等のものとして位置づけた。それらをもとに天文民俗から教育の根幹にかかわる議論を行ない、今日的

意味を考える

「教育現場が学校ではなかった」という世界を単に過去のもの、いまでは参考にならないもの、そこで形成され伝承されたもの（和名とか七夕とか月見とか…）を教材として補助的に使う…ということにとどまらないことをめざせないか考えている。教育というものが一人前になるための知識の伝達、人間形成、自ら学ぶ力の育成等であり、それを行なう主な現場（もちろん公民館、家庭教育等も忘れてはならない）が学校であるというのが今日の姿であり、それから逃げるができない。一方で、教育というものが世代を越えた知の継承である限りにおいて、「教育」は「伝承」の今日の姿でもあろう。

教育の根幹にかかわるものとしての天文民俗の議論を深めていくにあたってさらに異なる視点から考え天文民俗から教育の根幹に迫るチャレンジを試みる。

7.2 他の自然環境との連続と景観の構成

星は、他の自然環境と連続したものであった。水平線から姿を現す星ぼしを見たとき、他の自然環境との連続を感じる。海と陸の接点は海岸であり、海と空との接点は水平線である。夜になると、海と星空との接点が水平線となり、水平線で、島々、対岸の山々が星空をバックにシルエットとなる。そして、海から、島々、対岸の山々から、星ぼしが生まれるようにその姿を現す。星は、海、陸、島、山とまったく別のもの、かけ離れたものではなく、連続したものであった。海、陸、島、山、星は、ともに生活の景観を構成していた。別々のものとしてではなく、連続して景観を構成していた。

水平線から登場した星ぼしは、高度を上げていく。プレアデス星団、アルデバラン、オリオン座三つ星、シリウスと、順に登場したのを見てイカ釣りの目標にしたケースがあっ

た。オリオン座三つ星のとき釣れなかったから、その次のシリウスを待つというように…。そして、空に輝く星を野に咲く花のように感じ、それが次項のように星名に反映された。

7.3 事例—北海道積丹郡積丹町美国

1979年4月、北海道積丹郡積丹町美国で出会った明治41年生まれのイカ釣り漁師から聞いた話である。

「何でもかんでも、わしゃたいてい試してみた。アカボシちゅうアカメシタ星があがるの。それからサンコウだな。アカボシからサンコウだな。サンコウと言って、同じ間隔の星が三つあがるの。それからやっぱり二時間か二時間ちょっとあまりあとに、アオボシという星があがるの。数ある星のなかでアオメシテひかるの。その星がいちばんつく。その星とアカボシがつくの。どっちの星もつくけど、アオボシちゅうのがいちばんつく。完全につくだ。そのかわりずっと時間がおそいのよ」

北海道のイカ釣り漁師まで、時間軸と空間軸を越えて役星の知識が伝えられた。それは伝承の力であるが、換言すれば教育の力でもあった。伝承を単に受動的に受け止めるのではなく、自分の目で確かめ試行錯誤を繰り返しながら、アオボシの出にいちばんイカが釣れることを学んだ。アカボシ（赤星）は、おうし座アルデバラン、サンコウ（三光）は、オリオン座三つ星、アオボシ（青星）は、おおいぬ座シリウスのこと。星の色、数を感じ、それをもとに形成された星名で語った。観察と書かずに、あえて「感じる」と書いた。生活者にとって、星を対象として観察したというよりも景観を感じたと記したほうがより適切な表現だと考える。

7.4 事例—兵庫県神戸市深江

神戸市深江の対岸、南のほうは紀州である。紀州に蜜柑が実る10月頃の明け方、カノー

プスが紀州の方からのぼる。1984年10月、明治39年生まれの漁師から聞いた話である。「紀州の方、和歌山の方、まあ大きい星出まんのや。紀州のみかん星いう。三時頃によく出よった。紀州のみかん星出たら間（ま）ないわ。夜明けてくる。南の山のちょっと上に、紀州の山の上に見えるから紀州のみかん星」カノープスだけでなく、深江の南に相当する「紀州」とで構成する景観を感じていた。そして、その地域の産物「みかん」が実る季節を感じていた。

7.5 景観による判断からデジタルへ

忘れてはならないのは、星を見ようと思っ
て星を見るのではなかったということ。星
を見るのが目的ではなかったということ。星
だけを見るのではなかったこと。今、何時頃
かなと、知りたくなったら、時計を見るの
ではなく、空を見上げた。そして、あの星が、
たとえば、スマル（昴）が、あの木の上くら
いに輝いているから、あと2時間で夜が明け
る—と感じた。即ち、時刻を知るとい
うことが、デジタルの数字で表示された時計
を見ることではなく、たとえば星と木々で
作る景観を感じるということだった。

ところが、時刻を知るとい
うことだけでなく、あらゆる判断が、景観
即ちイメージの観察ではなく、デジタルの
数字にもとづくように時代とともに変化し
ていった。そのことが人間の能力にとって、
真に発達になったのだろうか。教育の根幹
にかかわる人間の大切な能力を退化させ
てしまった面はないだろうか。天文民俗
の中で見られた景観による判断、唄等の
伝承による継承を意味付け、星が山や海
と同様、日常的な景観であり、生活及び
生業と密着した自然環境のひとつであり
続けることが人びとの学びにとって妥協
してはいけない原点ではなかろうか。

7.6 伝承の多様性から教育の根幹に迫る

プラネタリウム等の天文教育現場で、しばしば徳蔵が北極星の動きを発見する物語が取り上げられる。しかし、多くは、野尻抱影の著書に掲載された伝承を元にしており、多くの多様な伝承が切り捨てられている。よく似た事例が南西諸島にあり、石垣繁は、喜舎場永珣が「内容は大同小異であったので読者の倦怠を考慮して一つだけ代表的なものを取り出して、ほかは思い切って割愛した」と述べていることにたいへん心残りがあったことを記している[11]。喜舎場の大きな仕事を手伝ったなかで石垣が感じたこと、それと同じことを北尾も野尻の仕事のなかで感じていた。北極星の動きに関する徳蔵についても割愛してはいけぬ多様な豊かな伝承があった。動きの発見の方法は、障子や屋根瓦、松の木等、動きの大きさは障子の軸一本、三寸、瓦1枚、動かないことの発見等、発見者は徳蔵の妻だけでなく天竺徳兵衛の妻、紀伊国屋文左衛門等多様であった[12]。

これらの多様性は、時間軸、空間軸を越えて伝承が語り伝えられたことに基づく。その語り伝えるということが教育という機能であると考えたとき、教育によって生まれた文化の多様性であると位置づけることができる。その多様性こそ、人間の営み、文化の生命であり、絶対に切り捨ててはいけぬものである。

7.7 定説に疑問を持ち、乗り越えてることから学びの根幹に迫る

沖縄県八重山の星見石を農耕の目標にしたと、プラネタリウム等で解説することがある。

実際、1979年3月、竹富島の上勢頭亨氏から次のように聞くことができた。

「星見石の穴は卯の方向に真正面に向けて穴をあけてその月内に星が見える時、見えない時を以って作物の播種や収穫をなす」



図13 竹富島の星見石（1979年3月撮影）

また、本仲信幸氏は、ウルルシブシ（ウルルシとは群れ。ムリカブシ即ちプレアデス星団のこと）について、次のように伝えていた。

・小満（筆者注：5月20日～22日）

ウルルシブシ、イリヨドン

ムリカ星は入没するので見えない。イリヨドン（入夜止）：星の入没。

・芒種（筆者注：6月5日～6日）

ウルルシブシ、アイヨドン

ムリカ星は出光するので見える。アイヨドン（上夜止）：星の出

・昔は暦もなく、草木の形、模様、星の出没などで季節を定めて作物を作った。

ウルルシブシ、イリヨドン：緑豆を撒く

ウルルシブシ、アイヨドン：米の収穫

・その後、「星見石」を建て、ウルルシブシで観測して播種の時期を定めたと伝えられた。

星見石以前から、星の出、入り等により農耕の季節を知っていたのであるが、星見石を

建て、穴から観察することのメリットは何であろうか。周囲に灯りがあれば星見石の穴に目を近づけることによって、東の空低く輝くウルルシブシを見ることができる。ただし、方角は卯ではなく寅である。

しかし、わざわざ星見石を用いなくても低空に姿を現すウルルシブシをそれぞれの家から見る方が簡単で確実ではないだろうか。星見石の観察によって時期の決定の精度をめざした面はあるが、農耕に決定的な寄与をしたとまで言えると検証されただろうか。

星見石は、石垣島旧石垣村等にもある。確定は出来ないが、波照間島の星見石と言われている立石もある。疑いのあるものとして、宮古島の立石がある[13][14]。

星見石は単なる道具としてだけではなく、集落の人びとを集めて農耕の季節を指示する統治の意味、空に向かってそびえる星見石と群れ星をつなぐものとしての象徴の意味はなかったであろうか。

1984年3月西表島的那根武氏から、図13のように竹竿を用いた農耕の季節を決定する方法が伝えられていると教えていただいた。

日没後、農家が竹竿を直立させて、ブルブシが真上にある時が田植えの時期だった。東寄りの場合は田植えは早かった。西寄りの場合は田植えは遅かった。竹竿の高さは約2mだった。ブルブシの高度がおおよそ75度以上になれば真上と錯覚してしまう。1月20日過ぎくらいには間違えて田植えをしてしまう。西表島の田植え時期は2月からである。早すぎないように地面に竹竿を立てて両手で握ってブルブシがぼぼ天頂にやってくることを知ったのだった。

このような西表島の事例を含めて星見石を用いない農耕の季節を知る伝承の検証をさらに行なうことを、今後の課題としたい。いままで注目されなかった多様で豊かな伝承から天文教育、天文の学びの根幹に迫っていく可

能性を信じて…。

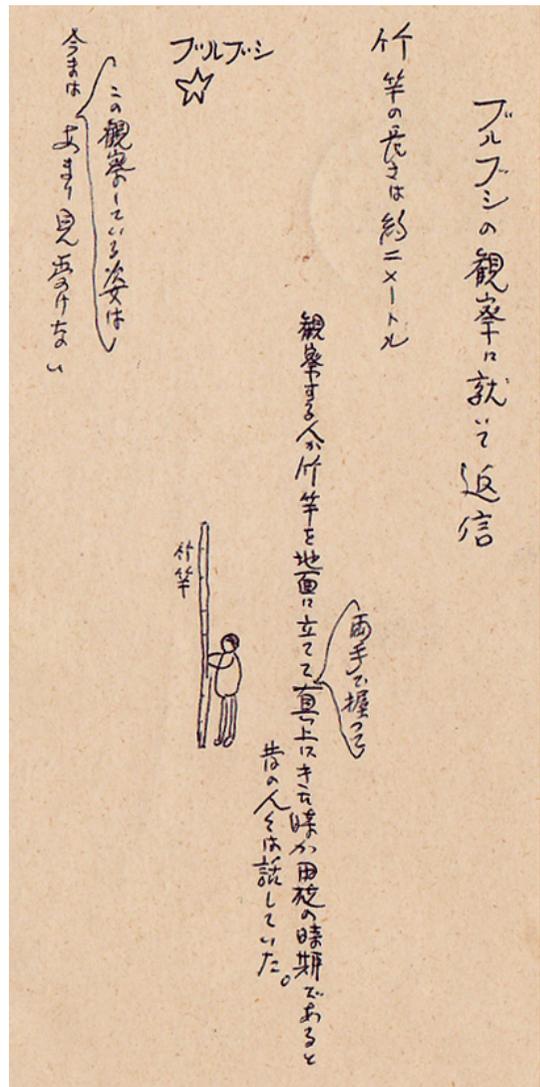


図14 西表島の竹竿を用いた観察

8. おわりに

本稿をまとめるにあたって、実生活の学びのなかで伝えられた星名伝承を語ってくださった伝承者のひとりひとりにお礼を申し上げます。また、本稿に掲載させていただいた沖縄県の調査に多大なご協力をいただいた友利健氏、福里美奈子氏、河合準子氏に紙面を借

りてお礼を申し上げます。

また、宮城県気仙沼市の調査を東日本大震災の後、天文教育普及研究会会員比嘉義裕氏と進めた。悲しいことに比嘉氏は2015年星空へ旅立たれてしまった[15]。ここに比嘉氏撮影の貴重な映像を近畿支部集会で活用させていただいたことを報告させていただきます。

文 献

- [1] 北尾浩一（2018）『日本の星名事典』，原書房，pp.144-147. pp.378-379.
- [2] 金城誠「星の方言名一糸満市字糸満」『やちむん第9号』やちむん会，1986，pp.47-53.
- [3] 野尻抱影（1973）『日本星名辞典』，東京堂出版，p.185.
- [4] 徳之島町の松山光秀氏から1984年に提供を受けた資料。
- [5] 波照間島の新城勝氏による。
- [6] 石垣繁氏による。
- [7] 現地調査、アンケート調査、文献による。
- [8] 北尾浩一（2010）「天文民俗調査報告（2009年）」『大阪市立科学館研究報告』，pp.23-24.
- [9] 北尾浩一（2019）「天文民俗調査報告（2018年）」『大阪市立科学館研究報告』，pp.77-79.
- [10] https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1419881.

htm

- [11] 石垣繁（2017）『八重山の稲作儀礼と民俗』，南山舎，pp.6-7.
- [12] 北尾，前掲書，pp.289-297.
- [13] 黒島為一（1989）「人頭税石？一八重山からの問題提起」『地域と文化』第52号，pp.2-14.
- [14] 北尾浩一（2020）「天文民俗調査報告（2019年）」『大阪市立科学館研究報告』，p.36.
- [15] 原田 敦（2015）「比嘉義裕さんを偲んで～星カフェみやぎ座のご紹介～」『天文教育2015年11月号（Vol.27 No.6）』天文教育普及研究会，2015，pp.11-13.



北尾浩一

（※上の写真は、宮城県気仙沼市大島にて、比嘉義裕氏撮影）

* * * * *